「京武者」の東国進出とその本拠地について

―大井・品川氏と北条氏を中心に―

野口　実

はじめに

近年、中世前期の武士が流通・生産に規定される都市的な存在であるとする視角からの研究が進んだ結果、その在京活動が注目されるようになった。とりわけ、十二世紀前半における源氏系「京武者」の在京・在地双方における一族間の分業関係を指摘した須藤聡・伊藤瑠美の研究は成立期の武士研究に大きな画期をもたらす成果といえる。[1] この指摘は、元来畿内近国に本拠を持ちながら河内源氏に従属し、その爪牙として東国に進出した「京武者」を出自とする波多野・八田（宇都宮）・山内首藤・大中臣（中郡・那珂）氏などにも敷衍できよう。[2]

さらに保元・平治の乱以降の時期になると、それまでは在地活動に専念していたように見える国衙在庁系の千葉氏なども、積極的にその子弟・一族を中央に出仕させていることが明らかである。

治承四年（一一八〇）、源頼朝の挙兵に呼応した千葉常胤には、知られる限り七人の男子があったが、六男の胤頼は京都に出て滝口に祗候し、その縁で知己を得た摂津渡辺党の遠藤持遠の推挙をえて上西門院に仕え、その御給に

よって従五位下に叙された。頼朝が挙兵したとき、常胤に参向を積極的に勧めたのはこの胤頼であったという。また、胤頼の兄弟の一人である日胤は園城寺に入って阿闍梨となり、律上（律静）房と称した。彼は、同寺における反平家勢力の中心となって、平家打倒に挙兵した以仁王・源頼政を迎え入れ、その後、王に従って南都を目指す途中、討死を遂げたと伝えられている。[3]

この千葉氏の例からも知られるように、十二世紀後半の時期、個々の東国武士もすでに京都の文化を受容・咀嚼し、中央政界の動向を機敏に察知するための情報ネットワークを構築していた。[4] 治承・寿永内乱は源頼朝や木曾義仲などによって統合された東国武士たちが列島規模で移動し、合戦を展開した史上空前の内戦であったが、その前提として、こうした広範な地方武士の在京活動が指摘できるのである。

ところで、河内源氏系の京武者が東国に進出するに際して、当該国の知行国主や受領の支援があったことは既に指摘したところである。[5] この時代、中央と地方社会を結ぶルートは多様に存在したが、やはりあらゆる側面において最も太いパイプは国衙のルートであった。

諸国に下って、この国衙を統轄する機能をになったのが目代であるが、とくに在庁官人＝在地有力武士という図式が鮮明な東国の場合、目代には都の武士が選任・派遣されるケースが多かったようである。[6]

本稿では、そのような、十二世紀に至って東国に下向して中央と在地とのネットワークを構築し、治承・寿永内乱に臨んだ存在として武蔵の大井・品川（品河）氏と伊豆の北条氏を取り上げ、その存在形態について、在地における本拠の立地の問題を重視ながら検討を加えたいと思う。

注

(1) 須藤聡「平安末期清和源氏義国流の在京活動」(『群馬歴史民俗』第一六号、一九九五年)、伊藤瑠美「11～12世紀における武士の存在形態—清和源氏重宗流を題材に—」(『古代文化』第五六巻第八・九号、二〇〇四年)。なお、須藤聡「保元・平治期の政治動向—美濃源氏の源光保・光宗の活動を中心に—」(『西垣晴次先生退官記念　宗教史・地方史論纂』刀水書房、一九九四年)は、美濃源氏が伊勢平氏と類似した動向を示したことが指摘されており、興味深い。

(2) 「京武者」の概念については、元木泰雄『武士の成立』(吉川弘文館、一九九四年)を参照。また、波多野・八田(宇都宮)・山内首藤氏の存在形態については、拙著『坂東武士団の成立と発展』(弘生書林、一九八二年)・同『鎌倉の豪族Ⅰ』(かまくら春秋社、一九八三年)・同『中世東国武士団の研究』(高科書店、一九九四年)、大中臣(中郡・那珂)氏については、網野善彦「桐村家所蔵「大中臣氏略系図」」(同『日本中世史料学の課題—系図・偽文書・文書』弘文堂、一九九六年、初出一九八二年)を参照されたい。

ちなみに、大中臣氏の出自について、桐村家所蔵「大中臣氏略系図」には、初代の頼継は後二条関白師通の子だが、大中臣に改姓したとあり、その子に頼経が見える。一方、『尊卑分脈』(国史大系本第四篇(紀氏)二一五頁)には、ちょうどこれに符合するかのように「京極殿(師実)恪勤」の宗賢の子頼賢に「改姓大中臣」とあり、その子に頼継、孫に頼経の名が見えている。おそらく、摂関家に仕えていた紀氏の一流が大中臣氏を称し、且つ武士化して摂関家の武力を構成していた河内源氏に従ったのであろう。

(3) 千葉胤頼・日胤については、拙著『坂東武士団の成立と発展』・同『鎌倉の豪族Ⅰ』を参照されたい。

(4) 当該期における東国武士の文化水準については、拙稿「坂東平氏と『平家物語』—上総広常・『源平闘諍録』・畠山重忠のことなど—」(『軍記と語り物』第三八号、二〇〇二年)、同「鎌倉武士の心性」(五味文彦・馬淵和雄編『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院、二〇〇四年)を参照されたい。

(5) 拙稿「豪族的武士団の成立」(元木泰雄編『日本の時代史7　院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年)。

(6) 永久三年(一一一五)四月二十六日「平資孝文書紛失状」(『平安遺文』一八二三号)に下総目代として見える平資孝は、白河院の近臣で検非違使として活躍した経歴をもつ藤原盛重が相模守に任じた際にも目代をつとめているが(『長野県史　通史編　第一巻　原始・古代』一九八九年、七三〇～七三一頁)、彼の出自はおそらく伊勢平氏と思われる。

また、平家打倒に蹶起した源頼朝が最初のターゲットとした伊豆国目代山木兼隆も、その一例に加えることが出来よう。伊豆の流人であった兼隆が、平治の乱以降、長くこの国の知行国主をつとめた源頼政の敗亡の後、新たに知行国主となった平時忠から目代に登用されたことはよく知られている。彼は伊勢平氏一族の京武者の出身であり、かつて検非違使別当平時忠のもとで判官として活動した経歴をもつ存在だったのである(拙稿「院政期における伊勢平氏庶流―「平家」論の前提作業―」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第一六号、二〇〇三年)。

上総国においても治承三年(一一七九)十一月のクーデターによって上総介に任じた平家の有力家人藤原忠清の目代として平重盛の家人であった平重国が下向していたらしく(拙著『中世東国武士団の研究』)、下総にも「元自有勢者」で「平家方人」の目代がいた(『吾妻鏡』治承四年九月十三日条)。

さらに、長く平知盛の知行下に置かれた武蔵国にも、目代として平家家人が下向していたことが想定され、実際、清盛の有力家人平盛俊の子の盛継や知盛の家人である武藤頼平が在国した徴証がみとめられる(拙稿「鎌倉武士の心性」註(5)、今野慶信「東国武士団と源氏臣従譚」『駒澤大学史学論集』第二六号、一九九六年)。

なお、西国においても、平家の祖である正盛が、白河院の近臣藤原為房や顕季に仕え、彼らの任国である加賀や播磨に下って、国衙の検非違使所・御厩別当職に任じていたことが知られるし(『延慶本平家物語』第二中の十四)、讃岐においても、十二世紀後半、京武者で「公」を名の通字とする橘氏が目代をつとめていたことが明らかにされている(野中寛文「讃岐武士団

の成立」『四国中世史研究』創刊号、一九九〇年）。

一　大井・品川氏と品川湊

品川は金沢文庫古文書の明徳三年（一三九二）の「品川湊船帳」などから伊勢からの回船が往来する港湾都市として栄えていたことが知られるが[1]、それは中世前期まで遡るように思われる。すなわち、品川は神奈川湊とともに多摩川河口付近に位置し、国衙領に属することから、その流域に位置する国衙の外港「国府津」あるいは荏原郡の「郡津」の機能を担っていたと考えられている[2]。周辺には榛谷御厨など、十二世紀に成立した伊勢神宮領荘園も多い[3]。

当地の在地領主品川氏は東国武士としては希な紀氏系の大井氏の一族で[4]、京都と密接な関係をもつ存在であったらしい。大井・品川氏が国衙や秩父一族など武蔵の在庁系武士団とどのような関係を持つ存在であったのかということは、品川の港湾機能の評価の問題とともに大きな課題となるだろう[5]。

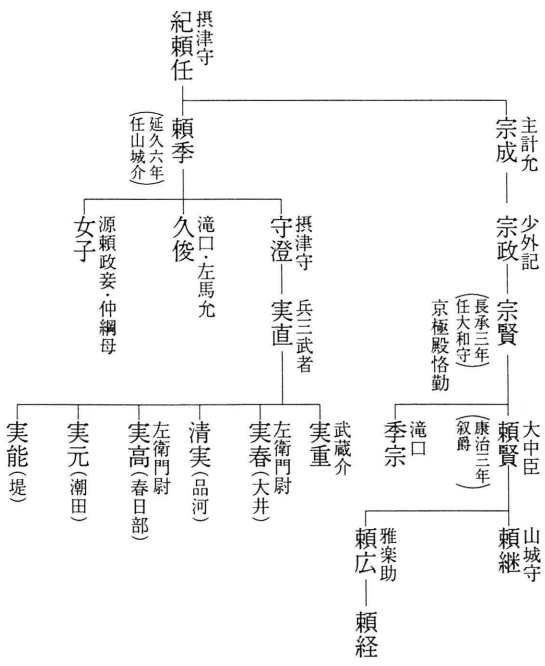
十二世紀末の時代において、この一族中、もっとも史料に恵まれた人物として大井実春がある。大井氏の本貫地は武蔵国荏原郡大井郷で、大井光三氏所蔵『大井系図』[6]によると、彼の父で「兵三次郎」と呼ばれた実直のころから武蔵国と関係をもったらしい。一方、『尊卑分脈』によると実直の通称は「兵三武者」で、院武者所祗候の経歴が知られ、その伯（叔）母は源頼政の妾で仲綱を生んだ女性という[7]。一族には滝口に祗候した者もあり、この一族は元来「京武者」の範疇に属する存在であったことがうかがわれる。

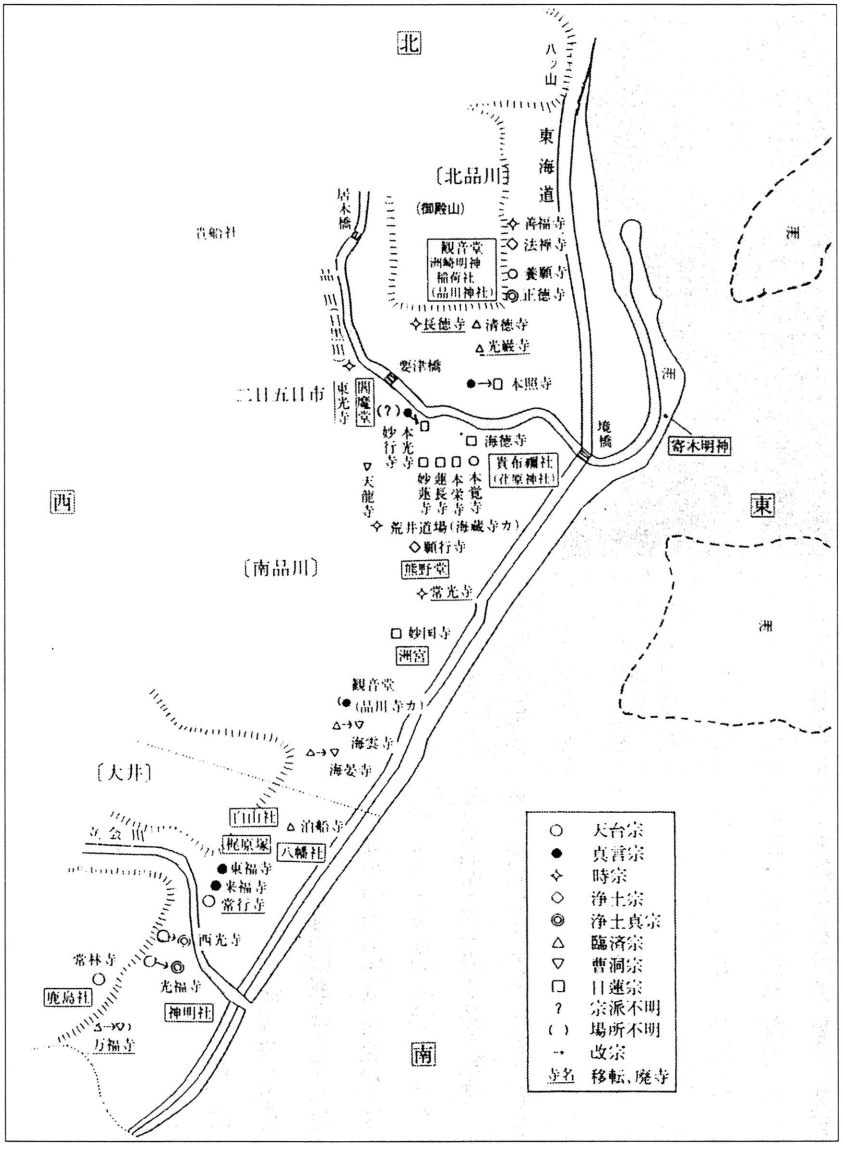
実直の子には実春・清実・実高・実元・実能があり、それぞれ大井・品河（品川）・春日部・潮田・堤を名字と

している。これらの名字は武蔵国内の地名であり、実直が武蔵国内の各地に勢力を扶植しうる立場にあったことを予想させる。また、これらの地名は大井郷潮田や六郷保内堤郷など、春日部を除いて、武蔵国東南部の沿岸に接している。国府津ともいうべき品川湊を掌握したこと、さらに後述のように、実直の子の実春が因幡目代を勤めたことが知られることなどから、実直は、おそらく武蔵国目代として下向し、在地の武士と婚姻関係を結ぶなどの方法で管国内に拠点を築いたのであろう。[8]

元暦元年（一一八四）三月、大井実春は伊勢国に潜伏する平家家人討伐のために伊勢に派遣され、同五月には同

〔系図１〕紀氏・大中臣氏一族系図
（主に『尊卑分脈』による）





〔地図１〕中世品川概念図　文政11年の品川図に中世関連の寺社等を配置したもの
（柘植信行「開かれた東国の海上交通と品川湊」より）

国において波多野三郎らとともに志太義広を誅殺している。文治元年（一一八五）十一月には、没収された河越重頼の旧領のうち、伊勢国香取五ケ郷が実春に給与され、また貞応二年（一二二三）の「関東下知状」によると実春の甥にあたる品川清経が同国員弁郡内曽原御厨の地頭職を安堵されている。これらのことから、大井・品川氏の一族が内乱期以前から伊勢国と深い関係にあったことがうかがわれる。伊勢との関係の契機が品川湊を掌握したことによるのか、それとも伊勢との関係が先にあったために品川湊を支配下におさめたのか、両方の可能性が考えられるが、このことは、大井・品川氏が単なる東国の在地武士としてではなく、グローバルな存在形態を有していたことを示す事実といえる。ちなみに、文治元年正月一日、義経が後白河院に大夫尉の拝賀を行った際、大井実春は「因幡御目代」として椀飯の役を勤めている（『大夫尉義経畏申記』）。この時の因幡守は中原（大江）広元であり、広元と大井氏（紀氏）の関係についても興味が持たれるところである。

中世港湾都市として知られる品川を、このような大井・品川氏の発展の基盤となった空間として評価し、再検討を加えることは、列島規模で醸成された治承・寿永内乱勃発の契機を探ることにもつながると思われる。

注

（1）綿貫友子「『武蔵国品川湊船帳』をめぐって―中世関東における隔地間取引の一側面―」（『史艸』第三〇号、一九八九年）。

（2）高島緑雄・峰岸純夫・柘植信行・北原進「（座談会）江戸湾岸の中世史―荏原地域を中心に―」（『史誌』三六号、一九九二年）における高島緑雄の発言。

（3）中世の品川湊については、インタビュー（聞き手・木村茂光／則竹雄一）「峰岸純夫　中世東国の水運史研究をめぐって」（『歴史評論』五〇七号、一九九二年）、柘植信行「開かれた東国の海上交通と品川湊」（網野善彦・石井進編『中世の風景を読

む　第二巻　都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社、一九九四年）、市村高男「中世と東国における内海水運と品川湊」（『品川歴史館紀要』第一〇号、一九九五年）、稲本紀昭・宇佐美隆之・柘植信行・峰岸純夫・渡貫友子「〈座談会〉中世太平洋海運と品川」（『品川歴史館紀要』第一三号、一九九八年）を参照。

（4）　大井・品川氏については、関幸彦「鎌倉殿家人大井実春の時代―内乱期の武士像・『吾妻鏡』ノート―」（『鶴見大学紀要』第四〇号、第四部　人文・社会・自然科学編、二〇〇三年）、同「御家人品河氏の西遷」（『品川歴史館紀要』第一八号、二〇〇三年）を参照。

なお、「侍」としての紀氏および「侍」が摂関家などの家産機構における「所」のみならず、中央より国守の走狗として地方に派遣され、国衙「所」の別当や目代に採用されたことについては、中原俊章「「侍」考」（『ヒストリア』第八三号、一九七九年）を参照されたい。

（5）　『尊卑分脈』（国史大系本第四篇〈紀氏〉二一七頁）によれば、実直の子実重は秩父一族である渋谷太郎光重の養子になったという。ただし、その子孫は薩摩国に西遷して同国祁答院柏原内平河を所領とし、祁答院地頭の渋谷氏と姻戚関係を結んでいることから、この記事は後世の追記である可能性もあろう。

（6）　高島緑雄・峰岸純夫・柘植信行・北原進（「〈座談会〉江戸湾岸の中世史―在原地域を中心に―」所掲。

（7）　ただし、仲綱の母については、『尊卑分脈』（国史大系本第三篇〈清和源氏〉一二八頁）に「源斉頼女」と見える。また、大井光三氏所蔵『大井系図』は実直について「源仲政為子」と記しており、この一族が摂津源氏の仲政―頼政―仲綱と近い関係にあったことがうかがえる。

（8）　実直は大井光三氏所蔵『大井系図』に「武蔵国々守」、実重は『尊卑分脈』に「武蔵権守」、『紀氏系図』（群書類従）には「武蔵介」と見える。これらの記事から、目代などに補されて武蔵に下向し、やがて在庁化した過程を看取することも出来よう。

二　伊豆北条氏の系譜とその本拠

1　北条氏の出自

伊豆北条氏の出自について手がかりとなるのは、『吾妻鏡』に「上野介平直方朝臣の五代の孫、北条四郎時政主は当国（伊豆）の豪傑なり」（治承四年四月二十七日条）と記していることと、元弘三年（一三三三）四月一日「大塔宮護良親王令旨」に「伊豆国在庁時政子孫高時法師」とあることで、これらによって北条氏は平直方の子孫であり、十二世紀末には伊豆国の在庁をつとめる家であったということが分かる。『吉口伝』の「元弘二年四三被相語条々」にも、伊豆国の在庁であった時政が、久寿元年（一一五四）十一月から保元三年（一一五八）十一月の間の頃、伊豆守だった吉田経房と接触したことがあり、これが後に頼朝と経房を結びつける契機になったことが記されている。[1]『吾妻鏡』は曲筆の多い典籍史料であり、護良親王の令旨も後世の史料ではあるが、『吾妻鏡』の「豪傑」の評価は措くとしても、これらは他の史料からも傍証される事実であり、ことさら否定するには及ばないであろう。

北条氏の系図は中条家文書「桓武平氏諸流系図」[2]など、鎌倉時代までさかのぼるものも含めて何点かのこされている。しかし、それらは『吾妻鏡』のいうように貞盛流平氏の直方を祖とする点では共通するが、直方と時政までの人名には異同が多い。[3]平直方は平忠常の乱の追討使になったが、その使命を達することができず、替わってそれを成し遂げた源頼信の嫡子頼義を婿に迎えて、鎌倉の屋敷を譲ったことで知られる軍事貴族である。

ところで、北条氏正統史観で編纂された『吾妻鏡』に時政の父の名さえ登場しないというのは実に不可解なことである。一方、時政の「腹心」で、在京してその眼代をつとめたとされる時定の卒伝を記す『吾妻鏡』建久四年（一一九三）二月二十五日条に、時定の父として「北条介時兼」が所見している。このことから、時兼―時定の系統

こそが本来の北条氏嫡流であるという見解が杉橋隆夫によって示されている。[4] ちなみに、時定は時政が任官する前から、兵仗・左兵衛尉・左衛門尉を歴任しており、時政の「眼代」として在京活動を担当したことからみても、おそらく頼朝挙兵以前の段階から京都に出仕していた経歴が予想されるのである。[5]

なお、平直方の子孫については都で活動した形跡はみとめられるが、[6] 北条氏系図以外に東国との関係を示す史料は見当らない（北条氏の系図には在地の地名である「熱海（阿多美）」を称する聖範なる人物も所見する）。このことからすると、北条氏の成立（伊豆留住ないしは土着）は十二世紀に入ってからのことである可能性も否めない。

いずれにしても、北条氏の系譜は平直方流とする一点だけでも東国武士団中きわめて珍しく、これは後述するような北条氏の存在形態の特異性に対応するものと考えられるのであるが、上記の矛盾が問題となる。そこで、注目されるのが佐々木紀一の示した北条氏の出自に関する見解である。[7]

佐々木は『源平闘諍録』一之上「自桓武天皇平家一胤事」に時政の祖父時家が伊勢平氏の出で「北条介」の婿になったとあることと、秋田県公文書館佐竹文庫蔵北酒出本『源氏系図』の大和源氏頼俊の孫にあたる僧信実の注記に「母平時家女伊豆国住人」と見えることに着目。双方の記事が矛盾なく成立することを記録の記事から証明した上で、「時家は大凡そ十一世紀後半から十二世紀初の人物と見なし得る」こと、すなわち時家を時政の祖父とすることの妥当性を指摘したのである。ちなみに、『源平闘諍録』によって時政に至る北条氏の系図を作成すると左のようになる。

維衡（常陸守）―維度（越前守）―維盛（筑後守）―盛基（美濃守）―貞時（兵衛大夫）
時家（北条介の娘に嫁す）―時包（四郎大夫）―時政（北条四郎・遠江守）

これによれば、伊豆在庁である直方流の北条氏（「北条介」）に伊勢平氏系の時家が婿入りをしたという図式が成り立つ。中条家文書「桓武平氏諸流系図」には、

直方――維方┬┐
　　　　　　└聖範――時家――時兼――時政
　　　　　　　盛方

と見え、時家の代から名の通字が「時」に変わっており、たしかに家の継承をみとめることは可能である。なお、中条家文書「桓武平氏諸流系図」・『尊卑分脉』ともに、時家は貞時の子としては所見しないが、後者には貞時の兄弟として盛時が見え、盛時の子にも正時・叙時があって（前者には正時のみ）、この系統の多くが「時」を名の通字にしていることが明らかである。また、念のために申し添えておくと、時包の「包」と時兼の「兼」は同訓の「かね」である。

一方、『源平闘諍録』の述べる直方から盛基に至る系譜については、維度が正度の誤りであることや所帯の官職に若干の齟齬がみとめられるものの、中条家文書「桓武平氏諸流系図」や『尊卑分脉』の記載と概ね一致している。ちなみに、『除目大成抄』第五には、永久二年（一一一四）正月、盛基が駿河守への補任を希望して提出した申文が収録されており、その文面から、この時彼が七十に及ぶ高齢であったことが知られる。[8]

ところで、『源平闘諍録』は「北条介」の系譜や時家が婿入りをした経緯については一切触れられていない。あるいは北条氏が平直方の子孫であるという所伝は、頼朝が源氏の東国支配の淵源を源頼義に求めて、その正当性をイデオロギー化したことに対応する意図、すなわち、頼義と頼朝、直方女と政子を等置することによって、北条氏

と源氏との縁由を強調する（このことは、頼朝がその嫡子に、頼義と直方女の間に生まれた「義家」になぞらえて「頼家」と命名したことからも裏付けられる）という目的によって捏造された可能性も考慮されるべきなのかもしれないが、[9] ここではひとまず、北条時政の祖父と目される時家が京武者層の出身であった可能性がつよいことを指摘しておきたい（北条氏がまったく直方流の系譜を引く存在であったとしても、注（6）に示した盛方の閲歴から見て、その在地化の時期はかなり遅い）。

佐々木紀一の指摘に基づいて右のように北条氏の系譜を理解すると、これまで説明のつかなかった北条氏（時政）に関する多くの疑問が一挙に氷解することになる。

① 時政が池禅尼の姪にあたる中流貴族出身の女性（牧の方）を妻に迎え、[10] 彼女の父とされる宗親が政子に仕えていたこと（『吾妻鏡』寿永元年十一月十日条）。

② 時政が頼朝を婿に迎え、その挙兵に積極的に参画した事に示されるように、深く中央の政治情勢に通じていたこと。

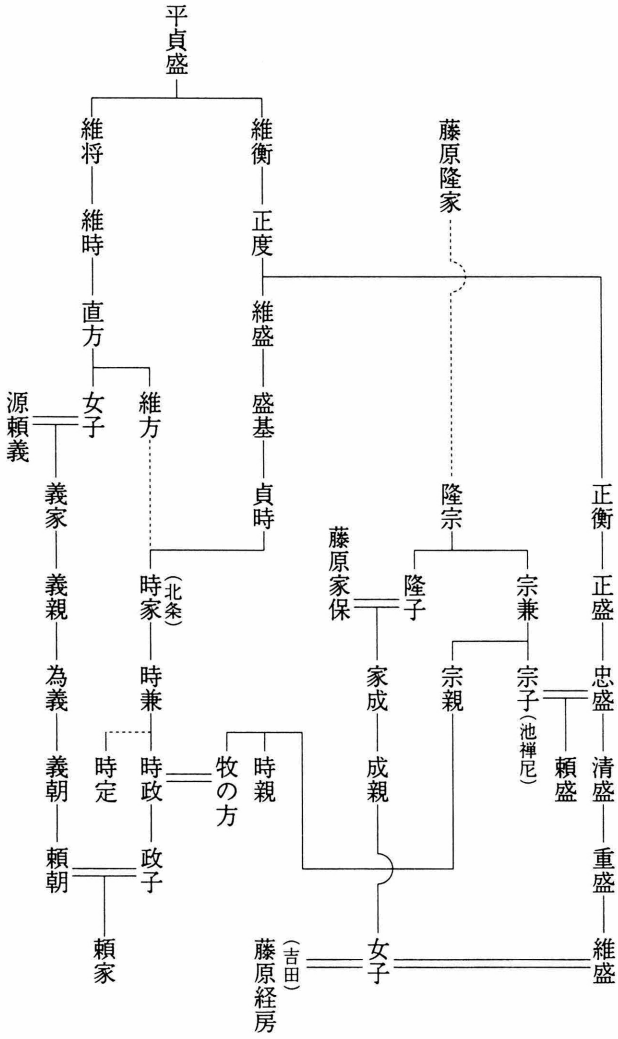
③ 文治元年（一一八五）、時政がいわゆる守護・地頭設置勅許を求める対朝廷交渉にあたり、その後、その腹心（系譜的には時政の甥または従弟あるいは兄弟）である時定が「眼代」として洛中警衛（義経の追捕と京・畿内近国の軍政）を担当したこと。

④ 国家守護権を掌握し、上級貴族としてのステイタスを獲得した頼朝が、その地位に相応しい家格の家から妻を迎えることをせず、政子を正室として遇し続けたこと。

⑤ 時政が鶴岡八幡宮寺の供僧を推挙するなど、都にあつい人脈を有していたこと。[11]

⑥ 時政・政子・義時が頼朝の死後、中原（大江）広元ら京下りの吏僚と連携し、有力御家人を圧して幕府政治

〔系図２〕北条氏と藤原・源・平氏との関係系図（兄姉弟妹順不同）



を領導しうる立場を確立し得たこと。

⑦　北条得宗家の有力被官平・長崎氏が、平資盛の後胤ないし伊勢平氏関氏の子孫と伝えられていること。[12]

以上、思いつくままに七つの点をあげたが、右の仮説のように北条氏が十二世紀前期まで受領に任官可能な「京武者」の家を出自とする存在であったならば、これらの問題はほとんど解決するのではなかろうか。

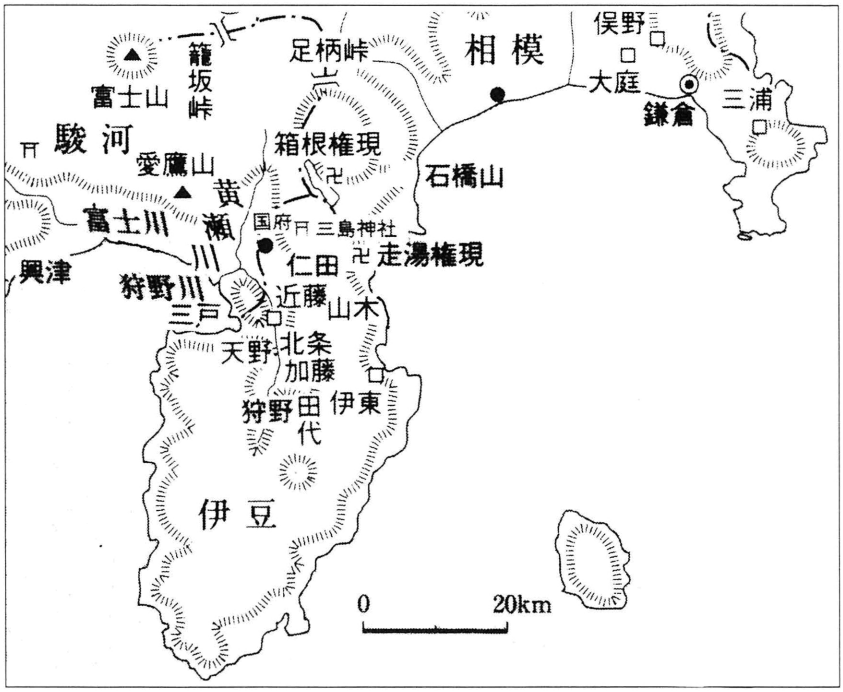
さらに③に関連して、国地頭でもない時政が伊勢国内に地頭職を補任していることや、時定が大和や伊賀で義経追捕の任務にあたることになった理由についても、[13]もともと北条氏が伊勢平氏の出身であり、また興福寺悪僧の首領として著名な信実と縁戚関係にあったとするならば事実に整合的な説明が可能になると思うのである。

2　伊豆国衙周辺の人的環境

ところで、十二世紀の伊豆国において北条氏は特殊な存在だったのであろうか。

伊豆の国衙近傍、田方郡の辺りには、①国衙支配の現地担当者として都から赴任した武士、②流人、③京都や畿内近国における政争で敗れて浪人となって伊豆に下り、在地の有力者のもとに寄宿ないし婿入りした下級貴族・武士、などが数多居住していた。[14]

①としては、近藤七国平がある。彼は『延慶本平家物語』第二末の五によると、承安三年（一一七三）流罪に処せられた文覚を伊豆守源仲綱の命によって伊豆に護送する役目をつとめており、また『屋代本平家物語』巻第五には「在庁近藤四郎国高」と見えている。[15]おそらく彼はもともと頼政・仲綱の家人であって、伊豆国衙に派遣されていたのであろう。こうした経歴が、のちに鎌倉殿御使として畿内近国や西国で活躍し、讃岐守護に登用される前提となったことは容易に推察されるところである。



〔地図２〕伊豆国衙周辺の諸勢力
（本多隆成・荒木敏夫・杉橋隆夫・山本義彦『静岡県の歴史』山川出版社、1998年、掲載の地図によって作成）

②としては、頼朝、文覚、山木兼隆の名がすぐにあげられるが、ほかに治承三年（一一七九）五月に流された筑前住吉社神官佐伯昌助がある。彼が流刑に処せられた理由としては、対外貿易における平家との対立が想定され、頼朝は挙兵の直前、昌助に平家討滅の祈祷を委ねている。

③としては、狩野庄の工藤氏（狩野氏）のもとにあった加藤氏をあげることができる。『延慶本平家物語』（第二末の十）や『源平盛衰記』（巻二十）によると、伊勢国の住人だった加藤景員は、同国の武士で平家に仕える伊藤某を殺したことで、国内に住むことが出来なくなって東国に逃れ、武蔵の秩父氏や下総の千葉氏を頼ったが、彼らは平家への聞こえを怖れて受け入れることをしなかった。しかし、伊豆において、近隣の武士三戸次郎との抗争が絶えないために武芸にすぐれた者を必要としていた工藤介茂光の庇護を得ることとなり、その婿に収まったのだという。ちなみに、流罪中の頼朝の導師となった走湯山（伊豆山権現）の住侶文陽房覚淵は、この景員の子息と伝えられる。相模の渋谷氏のもとにあった佐々木氏も加藤氏と同様の存在であったが、彼らが頼朝の挙兵に積極的に参加し、幕府成立後有力御家人として発展していくことは注目に値するものがあろう。

興福寺の悪僧土佐房昌俊は、興福寺衆徒内の騒擾がもとで「敵人こはくして」南都に住めなくなり、伊豆に下って頼朝のもとに祗候したと伝えられる。また、都でさる院の判官代をつとめていた藤原邦通は、藤九郎盛長の推挙によって配所の頼朝のもとに候じ、「洛陽放遊客」として遇されていたというが、彼もまた、文筆・芸能をもって地方に活路を見出そうとした存在と見ることが出来る。

流人である頼朝のもとにさえ、これだけの余所者たちが集まっているのだから、たとえば伊豆目代に取り立てられた山木兼隆のもとなどには京・西国から多くの才人が下向していたことであろう。『吾妻鏡』に兼隆の後見として見える堤権守信遠もその一人であったと思われる。彼は『延慶本平家物語』（第二末十）では「和泉判官（兼隆）

か一の郎等権守兼行」と見えており、おそらく兼隆に近い、伊勢平氏庶流を出自とする武士であろう。また、『源平盛衰記』（巻二十）に強弓の武士として描かれる関屋八郎は、もと河内国石川郡の住人であり、兼隆の従者にはほかに「京家ノ者」もあったという。

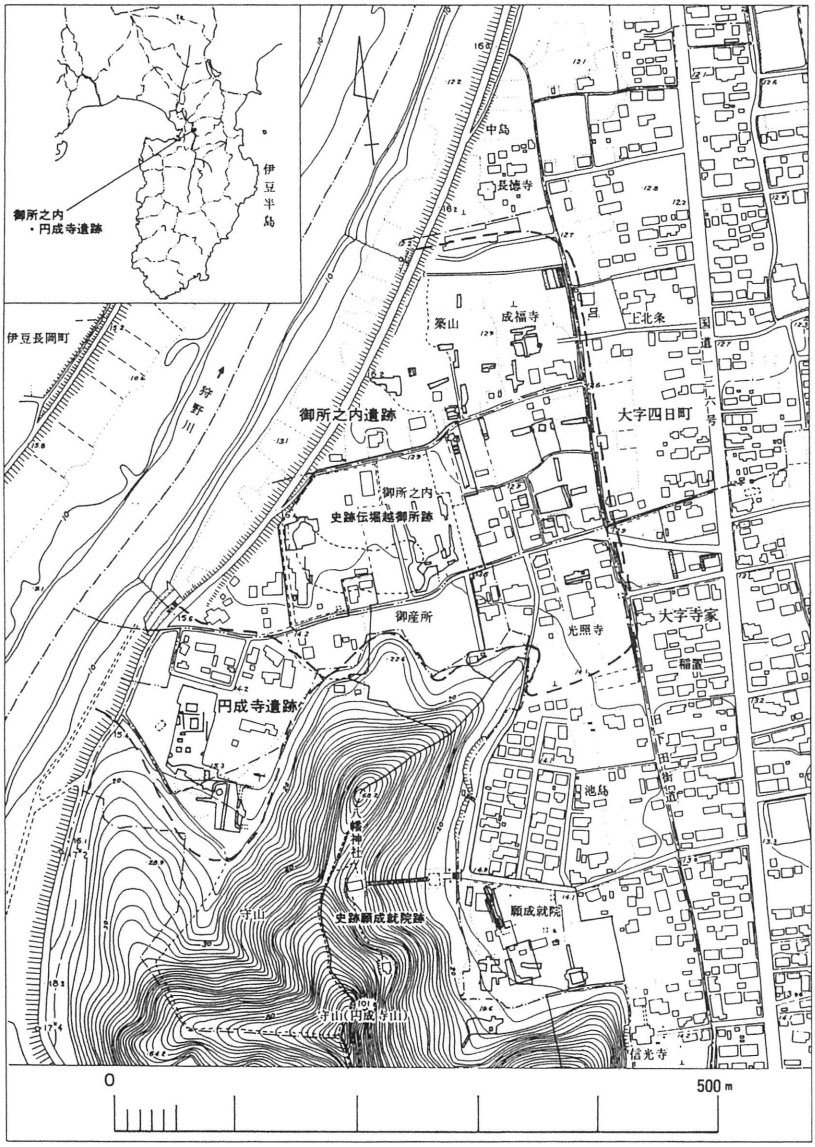
なお、すでに石井進が指摘しているように[16]、狩野介茂光の娘と伊豆守為綱との間に生まれた信綱が狩野庄田代郷を伝領して田代氏を称したり、同じく茂光の孫娘が伊豆守仲綱の乳母子で伊豆目代となった左衛門尉仲成との間に一男一女をもうけるなど、当時の伊豆、わけても国衙の所在した田方郡には、一時的に下向した貴人と在地有力者の娘との間に生まれた者たちが多く生活していたようである。

同郡天野郷の天野遠景は「殺し屋」としての評価が一般であるが[17]、一方、彼は頼朝挙兵以前から京官である内舎人を帯しており、鎮西奉行に任じられたのは、それなりの文化的素養と・行政官的能力を有していたからであろう。

このような伊豆国衙周辺における人的環境は、在庁「北条介」の家系が伊勢平氏の時家に継承された可能性の高さを傍証しており、本節冒頭に掲げた疑問にたいする回答は「否」ということにならざるをえない思われる。

3　円成寺遺跡の語るもの

静岡県田方郡韮山町の円成寺遺跡は中世の伊豆国田方郡北条に位置し、まさに時政の居館の置かれていたところにあたる。円成寺遺跡の呼称は、鎌倉幕府滅亡後、最後の得宗であった高時の母覚海円成尼が、後醍醐天皇からこの地を与えられて尼寺を建立したことによる。この遺跡については『月刊歴史手帖』第二三巻九号（小特集「伊豆韮山の中世を読む」一九九五年）所載の藤原良章・原茂光・岡陽一郎らの論稿に詳しいが、伊豆北条氏の評価に関係する指摘をまとめると以下のごとくである。



〔地図３〕円成寺遺跡全図
（原茂光「伊豆韮山円成寺遺跡について」『月刊歴史手帖』第23巻９号より）

① この遺跡からは、関東地方では他に類を見ない十二世紀代の手づくねの土器が多量に出土している。手づくねの土器は京都系の技術によるもので、酒宴に用いられる。このような出土状況は京都や平泉のような都市的な場で見られるもので、これまで関東武士の居館跡では未確認である。

② 十二世紀第三四半期にまでさかのぼる渥美などの陶器類が出土する。これは北条氏が伊豆の在庁官人として、水運を前提に狩野川に面した位置に居館を構えていたことに対応し、北条の地は水運によって渥美などの生産地と直結していたと捉えられる。

③ 白磁四耳壷・青磁同安窯系碗などの十二世紀代の舶載陶磁器が出土しており、北条氏が鎌倉に入る以前からこのような舶載品を所有できる力を有していたことを想定することが可能である。

④ 十二世紀代の遺構・遺物の出土状況は、総じて平泉に共通する点が多い。

⑤ この遺跡は、山を背負い水辺に近接するという中世前期の戦闘形態に対処した要害の地に位置するが、同時に、西を流れる狩野川、東を南北に走る下田街道という伊豆国における水陸の幹線ルートを押さえる交通・流通の要衝に立地している。

考古学的調査の成果を踏まえて、藤原良章は「北条氏を一地方武士としてのみ捉えるのはやはり相当な過小評価ということになるであろう」と述べ（「伊豆韮山円成寺遺跡と中世東国史をめぐって」）、岡陽一郎は「鎌倉時代の北条氏についてしばしば指摘される、交通・物流に対する志向は既に韮山の地でもみられる」ことを指摘している（「中世居館の光景―円成寺遺跡の立地から―」）。

近年、武士は草深い地方の農村を基盤としたというイメージが払拭され、その流通・交通に存在を規定される都市的な側面が明らかにされつつあるが、北条氏はまさにその典型的な存在といえるように思われる。その場合、在

地における所領の広さや公権力に敵対する際に動員された軍事力（兵員などの数）は北条氏の勢力を計る上で決定的な尺度とはなりえないであろう。

注

（1）森幸夫「伊豆守吉田経房と在庁官人北条時政」（『季刊ぐんしょ』再刊第八号、一九九〇年）。

（2）この系図に関する最新の研究成果と北条氏系図の部分の翻刻は、白根靖大「中条家文書所収「桓武平氏諸流系図」の基礎的考察」（入間田宣夫編『東北中世史の研究　下巻』　高志書院、二〇〇五年）に示されている。

（3）『尊卑分脈』・『続群書類従』・『系図纂要』所収の北条氏系図における相異については、奥富敬之『鎌倉北条氏の基礎的研究』（吉川弘文館、一九八〇年）に詳しい検討がなされている。また、時政以前の北条氏の系譜については、「北条氏系図考証」（安田元久編『吾妻鏡人名総覧―注釈と考証―』吉川弘文館、一九九八年）の第1章「時政以前」（菊池紳一執筆）が、この段階で知られていた系図の記事を網羅・検討している。

なお、近年紹介された、成立が中世に遡る時政以前の北条氏の世系を記した系図・史料としては、中条家文書「桓武平氏諸流系図」、『源平闘諍録』のほか、野津本「北条系図、大友系図」（田中稔「史料紹介　野津本『北条系図、大友系図』」『国立歴史民俗博物館研究報告』第五集、一九八五年）、野辺文書「北条氏系図」（『宮崎県史　史料編　中世Ⅰ』一九九〇年）、『延慶本平家物語』（横井孝「延慶本平家物語附載系図について」『季刊ぐんしょ』再刊第八号、一九九〇年）、妙本寺文書「平家系図」（『千葉県の歴史　資料編　中世3（県内文書）』二〇〇一年）、入来院家所蔵「平氏系図」（山口隼正「入来院家所蔵平氏系図について（上）（下）」、『長崎大学教育学部社会科学論叢』六〇・六一、二〇〇二年）、指宿文書「平姓指宿氏系図」（『鹿児島県史料　旧記雑録　家わけ十』二〇〇五年）などがある。

(4) 杉橋隆夫「北条時政の出身—北条時定・源頼朝との確執—」(『立命館文学』五〇〇号、一九八七年)。なお、これより先、時政が北条氏嫡流であることに疑問を提起した研究として、八幡義信「伊豆国豪族北条氏について」(『武蔵野』第四八巻第一号、一九六九年)がある。

(5) 北条氏の在京活動については、拙稿「承久の乱における三浦義村」(『明月記研究』一〇号、二〇〇五年)を参照されたい。

(6) 中条家文書「桓武平氏諸流系図」に時政の曾祖父聖範の兄弟として見える盛方(使・右衛門尉)は、『水左記』承暦四年(一〇八〇)年閏八月十二日条に「左衛門尉」として所見し、彼がこの日記の記主である源俊房の「年来家人」で、この日、四十八歳で死去したことが知られる。

なお、盛方については『続群書類従』所収「北条系図」に「依違勅被誅」、正宗本「北条系図」には「流人」と見える。

(7) 佐々木紀一「北条時家略伝」(『米沢史学』第一五号、一九九九年)。

(8) 盛基およびその一族については、拙稿「院政期における伊勢平氏庶流—「平家」論の前提作業—」、同「院政期における伊勢平氏庶流(補遺)」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第一七号、二〇〇四年)を参照されたい。

(9) 北条氏をはじめとする幕府有力御家人が源氏将軍家との関係をその優越性の根拠としたことについては、拙稿「国家と武力—中世における武士・武力—」(『歴史評論』五六四号、一九九七年)で触れた。

(10) 杉橋隆夫「牧の方の出身と政治的位置—池禅尼と頼朝と—」(上横手雅敬監修『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、一九九四年)。この論文における牧の方の年譜のシュミレーションには、政範の出産を四十六歳の時とすることなどに無理を感じざるを得ないが、時政と牧の方との婚姻の時期が頼朝挙兵以前であることについては間違いないと思う。

(11) 貫達人『鶴岡八幡宮寺—鎌倉の廃寺』(有隣堂、一九九六年)によると、鶴岡八幡宮二十五坊の初代の僧のうち、平家一門とされる人が十五人いるが、その推挙者のわかる十一人中、北条氏は時政が六人、義時が一人の計七人であるのに、畠山重忠

は三人、梶原景時は二人にすぎない。

(12) 得宗被官平・長崎氏の系譜に関しては、森幸夫「平・長崎氏の系譜」(安田元久編『吾妻鏡人名総論—注釈と考証—』吉川弘文館、一九九八年)を参照。森は平資盛子孫の可能性ありとするが、私は伊勢平氏庶流の子孫が平資盛の子孫を称するケースが多いことに注意したい。

なお、古澤直人は得宗被官平盛時が、六波羅探題北条重時からきわめて丁寧な書礼をもって遇せられていたことを指摘しており(同『鎌倉幕府と中世国家』校倉書房、一九九一年、四三四ページ)、このことは得宗被官平氏を資盛の子孫とする説の傍証となるであろう。

(13) 時政が伊勢平氏一族の有力武士河田入道跡の地頭職に伊豆の御家人宇佐美祐茂を補任したことについては、川合康「鎌倉幕府荘郷地頭職の展開に関する一考察」(同『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房、二〇〇四年、初出一九八五年)を参照されたい。なお、川合はこの地頭職補任を時政の京都守護の地位に求めている。

時定の活動については、上横手雅敬「吾妻鏡文治三年九月十三日条をめぐる諸問題」(同『鎌倉時代政治史研究』吉川弘文館、一九九一年、初出一九七三年)を参照されたい。

ちなみに、大山喬平は、時政が京都守護として在京中に頼朝とは異なるやや理想主義に傾いた対朝廷強硬路線に基づく政治方針を示したこと、にもかかわらず、京都での評判は悪くなかったこと、そして、この方針決定の黒幕が時政の政治顧問の立場にあった右近将監家景(もと九条大納言光頼の侍で、のちに時政の推挙によって頼朝に仕え、陸奥国留守所に補任)であったことを述べている(同「文治の国地頭をめぐる源頼朝と北条時政の相剋」『京都大学文学部研究紀要』第二一号、一九八二年)。この指摘は、時政の京都政界における人脈や時政自身の政治的意思・力量を推測する上で実に興味深い。

(14) 拙稿「流人の周辺—源頼朝挙兵再考—」(同『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出一九八九年)。

(15) 文覚が伊豆に配流された時の使者について、元暦二年正月十九日「僧文覚起請文」（『平安遺文』四八九二号）には「頼政朝臣之郎等源省」と見えるが、近藤国平は伊豆国衙の役人としてこれに従事したのであろう。

(16) 石井進『日本の歴史　第一二巻　中世武士団』（小学館、一九七四年）。

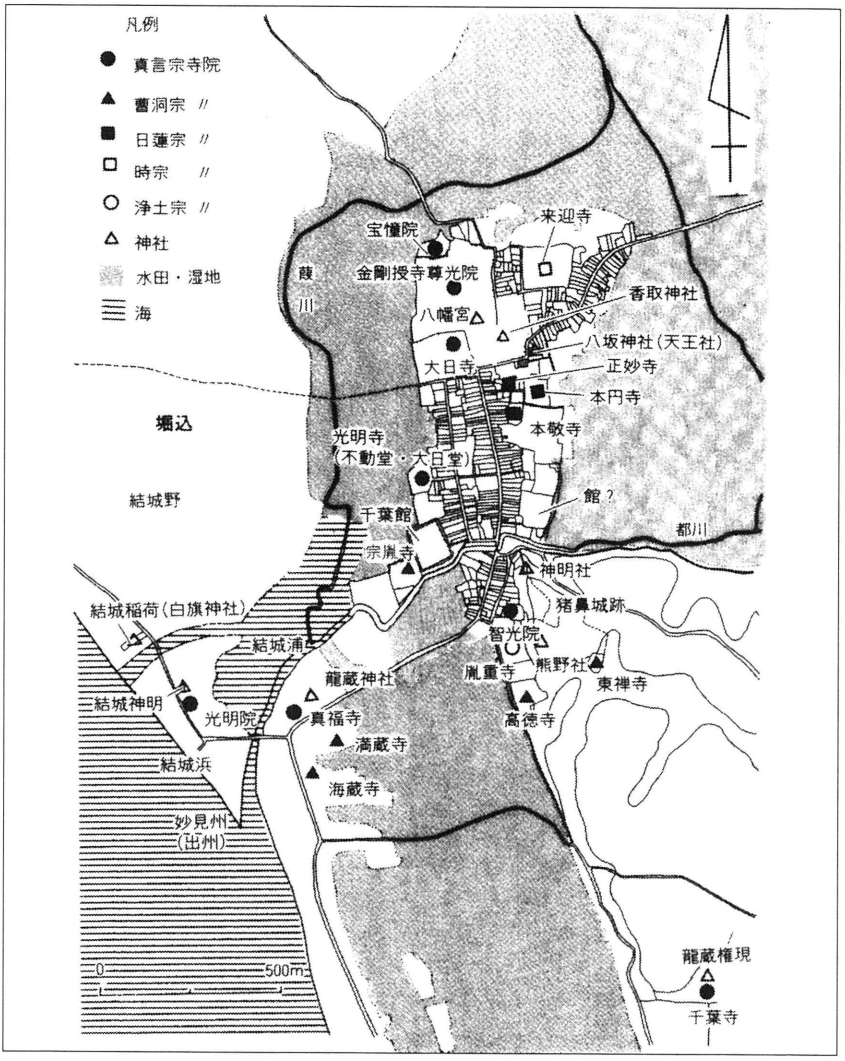
(17) 瀬野精一郎「〝殺し屋〟天野遠景」（同『歴史の陥穽』吉川弘文館、一九八五年、初出一九六〇年）

むすびに

佐竹氏など、十二世紀に東国に進出した京武者系豪族的武士が、地域の経済と情報ネットワークをおさえるのに好都合な交通・流通の要地、とりわけ内陸にアクセス可能な大河川の河口近く、ないしは幹線道路と河川の交差する地点に進出していることは、すでに旧稿で指摘したところであるが、[1] 在地系の千葉氏の場合も、十二世紀前半の段階で千葉庄の内陸部から都川河口に本拠を移動したという所伝があり、[2] この時期の有力地方武士の一般的動向として理解すべきもののようである。

本稿で取り上げた品川も千葉氏の本拠である千葉と同様に海陸交通の結節点となる河口の港湾の存在を前提に成立した。[3] 伊豆北条は狩野川河口から伊豆国府に溯り、さらに内陸に入った地点に位置するが、山がちな伊豆においてはもっとも農業生産力の高い平野部で、南伊豆や東伊豆に至る陸上ルートの交錯するまさに伊豆一国をおさえる上では絶好の地点に位置していた。この周辺には北条氏と同様に京都ないし畿内近国と深い関係にあるさまざまな人達が集まり、情報の集積という点においてもまさしく「都市的な空間」を構成していたのである。

鎌倉幕府は荘園領主や国司の支配に反発した東国武士団が、その棟梁として源頼朝を擁立し、彼らの階級的利益



〔地図４〕中世千葉推定図
（築瀬裕一「中世の千葉町」より）

（注）図中の猪鼻城跡は15世紀に築かれた城跡。
鎌倉時代は千葉氏の葬地となっていたらしく、蔵骨器として使用された「褐釉四耳壺」（12世紀中国製）「古瀬戸灰釉四耳壺」「常滑壺」が台地西辺部から出土している。

を守る機関として樹立されたという通説的な認識に基本的な誤りはないであろう。しかし、挙兵段階において頼朝を囲繞した人たちを仔細に検討していくと、頼朝の政治を直接動かし、手足となって働いたのは、彼の乳母の関係者や京都下りの吏僚であったり、平治の乱ののちに浪人となって東国に下向した佐々木父子や加藤兄弟のような畿内近国の武士たちであったことがわかる。彼らに共通する特性は、列島規模の人的ネットワーク、言い換えると広い情報網をもつということにあった。北条氏も大井・品川氏まさにそのような存在であった。

そしてまた、北条氏が頼朝亡き後の幕府を主導する権力を確立し得たのは、単に頼朝の外戚であったということだけではなく、北条氏の系譜的なステイタスや幕府成立以前からの在地における存在形態に起因していたと見ることができるのではないかということも本稿で指摘したところであった。(4)

注

(1) 拙稿「豪族的武士団の成立」。

(2) 『千学集抜粋』(千葉市立郷土博物館編『妙見信仰調査報告書(二)』一九九三年)など。

(3) 中世都市としての千葉については、簗瀬裕一「千葉城跡概説—千葉氏居城の基礎的考察—」(『千葉いまむかし』第一一号、一九九八年)、同「中世の千葉町」(拙編『第二期関東武士研究叢書5 千葉氏の研究』名著出版、二〇〇〇年)を参照されたい。また、品川の景観的特徴については、湯浅治久「中世東国の「都市的な場」と宗教」(峰岸純夫・村井章介編『中世東国の物流と都市』山川出版社、一九九五年)に要領よく整理されている。

(4) 時政が何ゆえに伊予の有力武士河野氏と密接な関係を結ぶに至ったのかということも、そのようなことを前提にしなければ説明がつきかねるように思われる。石野弥栄は「河野氏はまず源家将軍と結びつき、ついで西国進出を果そうとする北条時政

と深く結ばれたのであろう」（「河野氏と北条氏―いわゆる元久二年閏七月日関東下知状の再検討―」『日本歴史』第四九九号、一九八九年）とするが、この逆のケースの可能性も想定できるのではないだろうか。

なお、四国地方の武士にたいする時政の政治的影響力については、上杉和彦「中世土佐地域史論の諸前提―鎌倉幕府権力と土佐国の関係に関する一試論―」（十世紀研究会編『中世成立期の政治文化』東京堂出版、一九九九年）も参照されたい。

〈付記〉　本稿は平成十六年度京都女子大学宗教・文化研究所研究助成による共同研究「武士の本拠の立地に関する基礎的研究」（研究代表者・野口実、研究協力者・山田邦和）の研究成果に基づくものである。なお、これ以外に論文化されたこの研究による成果は以下のとおりである。

野口実　「平家の本拠をめぐって」（『古代文化』第五七巻第四号、二〇〇五年）

同　「仁和寺本『系図』収録「平安京図」に見える簀屋の設置地点について」（『仁和寺研究』第五輯、二〇〇五年）

同　「法住寺殿造営の前提としての六波羅」（髙橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』文理閣、二〇〇六年）

山田邦和「『福原京』の都市構造」（『古代文化』第五七巻第四号、二〇〇五年）

同　「福原遷都の混迷と挫折」（『古代文化』第五七巻第九号、二〇〇五年）

〈追記〉　本稿提出後、落合義明『中世東国の「都市的な場」と武士』（山川出版社、二〇〇五年十一月）が刊行された。この第二部第一章「源頼朝と東京湾」には、品河・大井氏をテーマに、本稿に近い問題意識にそってすぐれたアプローチが加えられており、本稿においては考察の対象に出来なかった多くの問題が明らかにされているので、あわせて御参照いただきたい。なお、同書を御恵送下さった落合氏に記して謝意を表したい（初校に際して）。

〈追々記〉　本稿において「円成寺遺跡」とした遺跡は、国史跡指定を受けて現在は「史跡北条氏邸跡（円成寺跡）」が正式な名称となっている。また、この遺跡の所在する静岡県田方郡韮山町は、二〇〇五年四月一日、周辺の伊豆長岡町・大仁町と合併して伊豆の国市となった（再校に際して）。

〈キーワード〉
武士　東国　大井・品川氏　北条氏